

だれもが幸せになる学校

岐阜市立藍東学園 9年

鈴木 陽菜乃

みなさんは藍東学園を知っていますか。

そう、今年から開校した私の通っている義務教育学校です。今日は、みなさんに藍東学園をご紹介します。

藍東学園には1年生から9年生までの同じ「好き」をもった仲間たちが集まる「ファミリー」という、グループがあります。普段の授業以外は基本的に、この仲間と過ごします。リビングタイムという名前の朝の対話の時間、帰りに1日を振り返るリフレクションタイム、もちろん給食や掃除も一緒です。博士探究「匠」という時間には、ファミリーの仲間とそれぞれの「好き」ととことん追究しています。

このファミリーでは年下の子と関わるので、いつもわちゃわちゃしていて、なごむことがたくさんあります。私のことを「ひなちゃん」と呼んでくれたり、給食を口いっぱいこぼおぼっていたり、先生が大好きで抱きついて離れなかったり。そんな可愛らしい小さな子たちから、私たちも学ぶことがあります。何も予定のない昼休み。4年生や5年生はファミリー教室前面のホワイトボードに駆け寄り、絵を描き始めます。限られた色しかないのに、とても色とりどりで、一人ひとりの個性があふれています。すると、ホワイトボードには小さな動物園が開園するのです。今の私では思い付かないような色の組み合わせを見ると、ああ私もこうだったかなと、昔を思い出して少し懐かしい気持ちになります。

4月にはファミリーで校区内を探検するファミリー遠足というイベントがありました。私たちのファミリーは校区内を探検しながら、大きな公園で生き物や植物を見つけるビンゴ大会をしました。みんなは全てのマスを埋めようと、狭いところから高いところ、低いところまで一生懸命探しました。結果は全ビンゴ。普段の私なら途中であきらめてしまいます。でも小学校3年生の子の熱量に背中を押され、最後までやり切ることができました。

藍東学園の魅力は、こうした人とのつながりだけではありません。

図書室はその象徴です。休み時間になるとたくさんの子が集まり、「お山」と呼ばれる3段の本棚で、本を読んだり、新しい本に出会ったり、おしゃべりをしたりしています。異学年の子とも自然に話せる、とても温かい場所です。理科ラボには実験道具がそろい、思いついた実験をすぐ始められる工夫があります。教室のつくりや机にも、生徒が学びやすい工夫がたくさん詰まっています。理科室と理科室を繋ぐ準備室には、恐竜や鉱石の壁紙で彩られ、いるだけでわくわくします。社会ラボや英語ラボにも、それぞれの学習に合った展示や教材があります。私たちは、自分に合った環境や方法で、のびのびと学ぶことができます。

もちろん大変なこともあります。

教科センター方式になり、全て移動教室です。たくさんの教科書を持って移動し、新しい校舎で迷うこともあります。授業に遅れそうになって小走りになったり、3階の人の波の中で小さい子とぶつかりそうになって、最近私は両手を上げる「無罪ポーズ」がくせになっていたりしています。

実は私は、小学5年生の冬から不登校になりました。それから約3年がたち、中学2年生になって友達の支えもあり、教室に戻ることができました。でも私は、「やっぱり、元不登校の私はリーダーにはなれない」と思い込んでいました。そんな私に、友達が声をかけてくれました。そして私は今年、ファミリーの議員という役職になりました。

人前に立つことは今でも大の苦手です。それでも下の子たちの手本になりたいと思い、さまざまなことに前向きに挑戦しています。私の挑戦には、いつも「下の子のために」という思いがあります。そんな気持ちにさせてくれたのも、ファミリーの仲間だなと感じています。

今私は、藍東学園が大好きです。

学年が違ってもしっかりと語り合える。教える人と教えられる人ではなく、同じものに夢中になれる仲間になれる。そんな関係が自然に生まれています。

藍東学園の教育目標は、「だれもが幸せになる学校」です。

私は、一人一人の個性を大切にしていくことで、世界は今より少しやさしくなると思っています。失敗してもいい。遠回りしてもいい。勇気を出して踏み出した一歩を認め合いながら、それぞれの個性を育てていく。そんな藍東学園は、今はまだ珍しい形の学校なのかもしれません。

でも、いつかこうした学校が当たり前になる日が来るかもしれません。

私はそんな最先端の学校で学べることを、とても誇りに思っています。